

カナダ・バンクーバーにおける日本人移民の家内労働

—— 20 世紀初頭におけるガーディナーの萌芽 ——

河原典史

I はじめに

19 世紀後半の北米では、博覧会でのパビリオンとして日本庭園が注目されはじめていた。それはヨーロッパからアメリカ合衆国の東海岸、さらに西海岸へと展開した¹⁾。このような日本庭園の萌芽について、筆者はカナダ西岸のブリティッシュ・コロンビア州（以下、BC 州）における日本庭園の建造について、次のように紹介してきた。

1843 年、ハドソン湾会社がビクトリア西方の水路沿いにゴージ公園を開園した。横浜市北方町（現・中区）出身の岸田伊三郎は、1907 年にこの公園でカナダ最初の日本庭園を建造し、その後もビクトリアに 3ヶ所の日本庭園を造園した²⁾。バンクーバー沖のポーウェン島には、1912 年に佐賀県三養基郡北茂安村（現・みやき町）出身の古賀大吉が日本庭園を造園した³⁾。彼らの経歴だけでなく、筆者は造園の社会・経済的背景、さらに労働力の確保についても検討した⁴⁾。さらに 1935 年には、前年にビクトリアで客死した新渡戸稲造を記念する日本庭園がブリティッシュ・コロンビア大学（以下、UBC）に建造された⁵⁾。すでに当時から、これらの日本庭園の造園に関わる日本人ガーディナー（gardener）が存在していた。しかし、その多くは白人の邸宅の芝草を刈り取り、落ち葉を拾い集める庭園業（maintenance）、いわば庭師に過ぎなかった⁶⁾。つまり、白人の「住」の環境整備に、日本人移民は少なからず貢献していたのである。

次に、日本人ガーディナー史をめぐる先行研究について、その研究方法から検討しよう。第二次世界大戦前にカナダへ渡った日本人の就業をみると、特定の業種に集中する傾向があった。排斥のなか、英語のままならない日本人が就ける職業は限られていた。それは渡航時期や日本とカナダの政策、そして先駆者の出現とその後の連鎖移住などによる。おもにサケ缶詰産業に関する漁業には和歌山県出身者が多く、製材業や商業には滋賀県、伐木業や炭鉱業では熊本県の出身者の占める割合が大きかった⁷⁾。とくに、日本人の活動について実証的な研究の必要性を説いた佐々木は、当時の日本人名簿⁸⁾や職業別電話帳⁹⁾を復刻し、それらを活用したバンクーバーでの日本人商店の実態解明を試みた¹⁰⁾。同様の方法で、末永國紀は滋賀県出身者の商業活動を考察した¹¹⁾。しかし、名簿には常設店舗しか記載されていなかったため、経営者が日本人であっても、そこでの雇用者は不明であった。さらに、非常設店舗の場合には、職種や就業地などは定量的に解明できなかった¹²⁾。つまり、日本人名簿に依拠してきた限り、佐々木や末永においても店舗を持たないガーディナーについては言及できていないのである。

このようなレビューをふまえて筆者は、定量的な日本人ガーディナーの活動について歴史地

理的アプローチから実証する方法¹³⁾を検討してきた。経年的に発刊されていた英語住所氏名録、通称 *BC Directory* には街路別に地番毎の居住者とその職業が明記されている。日本人については“Japanese”とだけ記されていたり、不正確な“oriental”や“Chinese”などと誤記されていたりしたが、1930年代以降になるとほぼ正確な氏名が記されるようになる。職業についても、被雇用者の場合には製材所や商店などの事業所名までが記載されている。したがって、先行研究で利用されてきた日本人名簿では不明であった庭園業を主体とするガーディナーについても、“gardener”と記載された日本人を確認することが可能となる。さらに、家屋1棟単位まで描かれた約1,200分の1スケールでの *Fire Insurance Plan* (火災保険図) との併用から、日本人ガーディナーの居住地について景観復原図を作成し、その地域的展開が把握できるのである¹⁴⁾。しかし、これらの資料の整備前における日本人ガーディナーの実態は不明であり、断片的なエッセイなどで紹介されるに過ぎなかった。繰り返しになるが、従来の日本語資料に依拠する限り、彼らの活動の把握は困難なのである。

そこで本稿では、20世紀初頭のバンクーバーにおける日本人ガーディナーの萌芽について明らかにする。当時、白人宅での家内労働における雑用の1つとして、料理とともに庭仕事があった。そこで英語を修得して資金を蓄積した日本人移民は、やがて他産業で活躍することが一般的であった。そのため、先に白人宅での家内労働に就いていた中国人と同様、その労働はあくまでも成功への前段階とされてきた。関連する統計や資料も未整備であり、何よりもそれをめぐる語り（オーラルデータ）は軽視されてきたのであろう。カナダ日本人移民史が看過してきたこのテーマには、新たな課題は少なくないのである。

II 資料の活用と研究方法

1 カナダ政府資料の分析

イギリスとのアヘン戦争（1840～42年）後、南京条約（1842年）によって清国は開港した。新たに中華民国が建国されると、福建省を中心とする東南部から多くの人々がアメリカ大陸やオセアニアなどへ渡った。カナダでは金・炭鉱業や鉄道工夫、そしてサケ缶詰産業での缶詰作業に彼らは携わった¹⁵⁾。中国に遅れて開国した日本も、「元年者」と呼ばれるハワイ移民を皮切りに朝鮮・台湾などへの殖民、そしてアメリカ大陸へ移民を送出した¹⁶⁾。

このような19世紀後半における中国と日本からの出稼ぎや移民の増加を鑑みたカナダ政府は、1902年に全430頁からなる実態報告書 *Report of the Royal Commission on Chinese and Japanese Immigration*¹⁷⁾ を刊行した（図1）。第1部は、中国人移民について27章から構成されている。そこには、前述した鉱業やサケ缶詰産業、さらに近郊農業などで白人に雇用される様子が厚く記述されている。

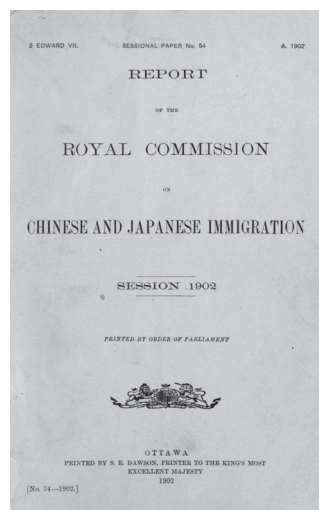


図1 *Report of the Royal commission on Chinese and Japanese Immigration, 1902* の表紙
 UBC Library Open Collections
 (<http://resolve.library.ubc.ca/cgi-bin/catsearch?bid=85000>)より転載

また、仕立業や洗濯業など中国人が多くを占める生業も報告されている。

そのなかで、第16章・家内労働者（Domestic Servants）の報告は興味深い。中国人移民が2,000人を超えるバンクーバーで262人、700人のニュー・ウエストミンスターで65人の中国人が、白人宅で家内労働者として従事していたのである。多くの白人家庭は中国人を雇用し、それは現地における中国人移民の1割を占めていた。1ヶ月に約30～35ドルで雇用される彼らの仕事には、調理を中心とする家事のほか、庭仕事があった。このような中国人は高額の賃金を要求したため、低賃金である白人女性の雇用が望まれた。彼女たちの賃金は20～25ドル、14～16歳の少女の場合には12～15ドルであった。何よりも、急増するアジア移民への偏見もみられたであろう。そこで、カナダ東部から白人女性の募集も試みられたが、それは困難であった。そのため、中国人に代わって日本人が雇用され、増加したのである。

一方、第2部の日本人移民については6章からなる。そのうち水産業、製材業と造船業のほか、第4章・その他の職業において鉱業、鉄道や海運、そして洋服仕立人と並んで家内労働者が記述されている。中国人と同様、多くの日本人が白人宅の家内労働者として雇用されていたのである。ただし、賃金は日本人の方が低額であり、雇用される日本人の満足度は低かった。カナダ入国当初において、日本人も次の職業へ転出するための生活手段、そして英語習得のために家内労働を選択するケースも少なくなかったようである。

報告書によれば、ビクトリアにおける139人の日本人労働者のうち、約40%にあたる57人が家内労働業に就いている。BC州の首都ゆえ、前述したサケ缶詰産業や製材業での雇用が少なかったとはいえ、この数値は高次といわざるをえない。家内労働者の仕事には、男女によって多少の差があった。女性は料理の下ごしらえや子守（ベビーシッター）などであるのに対し、力仕事を任される男性はベッドメイキング¹⁸⁾や庭仕事、つまりガーディナーとしての役割も含まれていたのである。

このカナダ政府の報告書によれば、まだ庭園業は独立した生業として認識されていなかったと思われる。しかし、この頃から家内労働の1つとして、特別な技術を要する庭仕事は日本人には有力な生業として注目されていたのである。

2 おもな家内労働とその賃金

表1は、1900年代初頭のバンクーバーを中心とするカナダ西部における日本人のおもな家内労働とその賃金である。これをみると、白人社会のなかで日本人は多種多様な業種で労働していた様子がわかる。一般的な普通家庭のほか、宿泊施設の旅館（ホテル）、さまざまなコミュニティの集会所である倶楽部、いわゆる食堂（レストラン）の洋食店や、おもに白人事業所がテナントとなる建物に関するビルディングなどで日本人は活躍した。

まずは、白人家庭を職場とする「普通家庭」に目を向けてみよう。資料には学僕とあるが、いわゆるスクールボーイは白人家庭の雑用を担う学生であり、スクールガールはその女性である。1907年におけるこれらの賃金は低く、ハウスウオークで1ヶ月に15ドル、学生による雑役では2～4ドルにすぎない。ただし、彼・彼女たちにとって白人家庭で働くことは、カナダ社会の生活習慣を学び、何よりも英語の取得への近道であった。

それに対し旅館、倶楽部や洋食店などでの賃金は30～60ドルである。普通家庭に比べ高給

表1 バンクーバーにおける日本人の家事労働賃金(1907・1919年)

就業場所	職業	1907年	1919年	%
普通家庭	ガーデンボーイ	35	60	171
	学僕	3~4	5	125~166
	自動車運転手(男性)	—	80	—
	コック(男性)	25	40	160
	コック(女性)	25	25~40	120~160
	スクールガール	2~3	5	166~250
	子守(女性)	10	15	150
	ハウスウオーク(男女)	15	15~30	100~200
旅館	ベルボーイ(案内係)	40	20~40	50~100
	エレベーターボーイ	35	40	114
	ポーター(手荷物運搬)	35	50	143
	給使	45	40	89
	コック	75	75	100
	皿洗	35	50	143
	パントリー(配膳係)	40	50	125
	酒場	45	75	167
倶楽部	ベルボーイ(案内係)	35	40	114
	エレベーターボーイ	35	40	114
	ポーター(手荷物運搬)	35	50	143
	ウェイター	40	40	100
	ビリヤード場のボーイ	35	45	129
	酒場	40	45	113
洋食店	コック	70	75	107
	ベーカリー(パン職人)	60	70	117
	ウェイター	40	45	113
	パントリー(配膳係)	40	55	138
	ブッチャー(肉屋)	45	100	222
	皿洗	30	45	150
ビルディング	ジャニター(管理人)	40	65	163
	エレベーターボーイ	30	50	167

注1: 単位はドル

注2: 学僕・スクールガールは食事付

注3: %は対1907年比

中山訊四郎(1921)『加奈陀同胞発展大鑑 全』,1054-1055より作成

なのは、接客にあたって語学が必要であったためである。さらに、旅館や洋食店のコックやベーカリー(パン職人)は、70~75ドルを得る技術職として認知されていた。

12年後における1919年の賃金をみると、旅館・給使やベルボーイを除いて、すべての職種で賃金は上昇している(表1)。1907年に比べてほとんどが、2~5割増の数値を示している。変化はないものの、コックのような技術職は、1907年当時においても比較的高給を得ている。もっとも増額率が高く、高給な職種はブッチャー(肉屋)である。精肉を切り分け、ハムやソーセージなども製造する彼らの技術は高次であった。

そのなかにあつて、普通家庭での雑務の1つである「ガーデンボーイ」の賃金は35ドルであった。コック、ベーカリーやブッチャーなどの賃金に比べると低額ではあるものの、旅館のエレベーターボーイやポーター(手荷物運搬者)などと同額であった。しかしながら、普通家庭における他業種に比べて、同業は最も高給であった。1907年には35ドルであったガーデンボーイの賃金は1919年には60ドル、1907年に対して171%に上昇している。前述したブッチャーに次いで、その増額率は高い。つまり、ガーデンボーイの需要が高まり、給金の値上げが生じたのであろう。芝草や季節毎の草花管理など、彼らには求められる技術があった。それは、バンクーバーにおける住宅開発の発展によるものに違いない。

Ⅲ ガーディナーとしての山本宣治

1 『山宣日記』にみる庭園業

カナダ日本人移民の活動を明らかにする資料として、体験者の日記があげられる。伝記・自伝・日記類に描かれたライフヒストリーは、文献史学の研究者から看過されてきた諸点が新たに発見される可能性を秘めている¹⁹⁾。ガーディナーの体験に基づく園芸や造園をめぐる同類の資料分析は、日本とカナダとの比較文化研究へもつながる。

生物学者であり、後に政界へ転進した山本宣治（1889～1929年）²⁰⁾は、青年期のカナダ滞在時に日記を書き綴っている。1889（明治22）年5月28日に京都市新京極でアクセサリー店を営む山本亀松・多年の一人息子として生まれた山本は、病弱のため神戸第一中学校（現・神戸高校）を中退後、宇治川畔の別荘（後の料理旅館「花やしき浮舟園」）で園芸に親しんだ。1906（明

表2 山本宣治の下宿での食事内容

日	朝	昼	夜	備考
5/14	マッシュ、トースト 茶	日本の米飯、白豆腐 味噌汁、餅菓子 かのこ、まんじゅう	白豆腐、牛肉 ほうれん草の浸し物 そば1杯	朝は新聞社、昼は芝生 筋向かいにあるパウエル 街の新聞社、3時に表 の部屋、夜食は鍋木家 裏の家の二階
15	マッシュ、パン	豆腐穀、カットフィッシュ 味噌汁、羊羹、チョコレート	カットフィッシュなど ビスケット	
16	トースト、マッシュ 茶	肉、千切り大根、汁 羊羹、ビスケット	肉、湯豆腐、味噌汁など	3食とも新聞社
17	—	豆スープ、シチューチキン ボイルドポテト、ゼリー 茶	ゆで卵、パン、プルーン 砂糖漬、茶	朝は寝ぼけていて食べ られず。ミセス・スミ ス邸へ下働き 昼はミセス・スミスの 家にて初めての食事、 家族と同じもの
18	マッシュ、トースト ココア	甘くないパンの様なもの マス、ボイルドポテト、茶	ビーフ、プルーン、茶	
19	マッシュ、トースト 茶	チキン、マッシュポテト スープ、茶、もち菓子 ネーブルオレンジ	豆腐汁、キャンディー	昼は教会にてオレンジと もち菓子、夜は新聞社
20	マッシュ、トースト 茶	スープ、漬したビーフ マッシュドポテト、茶 プルーン、キャンディー	パン、ゆで卵、 カステラ、 茶、ルバーブパイ	洗濯の日 昼はキャンディーは自 室
21	マッシュ、トースト ココア（砂糖無し）	カットフィッシュ、茶 ルバーブパイ、氷砂糖	マッシュドポテト ビーフカツレツ シロップ、茶	昼は氷砂糖は自室
22	マッシュ、トースト コーヒー	卵、パン、シロップ、茶	マッシュドポテト ラカン、バナナ、茶	
23	マッシュ、トースト 茶	トマトなどが入ったスープ パン、茶、バナナ1つ チェリー	カットフィッシュ レンコンおよび汁 天そば、かけそば パン、ミルク	そば2杯はカナダ新報社、 チェリーは石原氏より
24	—	花あられ、巻せんべい オレンジ	れんこん汁	朝は寝坊、 昼はロンズデール・ ガーデン
25	マッシュ、トースト 茶	カットフィッシュ、汁	汁粉2杯	夜は鈴木氏の御馳走で ウエストミンスターア ベニューの汁粉屋
26	マッシュ、トースト ビフテキ	ネーブルオレンジ3つ サンドウィッチ ビスケット	冷やそうめん、浸し物 しゃちおこし（鍋木先生 方にて）	昼はスタンレーパー ク、夜は鍋木宅、 サンドウィッチは バターと カツオの佃煮入り

注：—は食事抜き

佐々木敏二編（1979）『山本宣治全集 第6巻』、汐文社、209-229より作成

治 39) 年、東京・早稲田の大隈重信邸での園芸見習を経て、遠戚にあたる眼科医・石原明之助²¹⁾に誘われた彼は、1907(明治40)年5月に園芸研究のためカナダへ渡った。5年にわたってハウスボーイ、庭園業やサケ缶詰産業などに従事した山本は、1911(明治44)年に父の病気のため帰国した。そして、旧制第三高等学校(現・京都大学の一部)や東京帝国大学(現・東京大学)で動物学を学んだ後、政治家として活躍した山本は、1929(昭和4)年3月5日に暗殺された。山本が綴った日記、通称『山宣日記』²²⁾は、後にキリスト教徒や思想家としての苦悩を読みとることに傾斜されてきた。しかし、生物学者の片鱗を窺わせるような漁場利用²³⁾やガーディナーとしての的確な記述は見のがせない。

本稿で論じるガーディナーに関する記述をめぐる考察の前に、カナダへ入国直後の1907年5月14～26日における山本宣治、通称・山宣の食事内容についてふれてみよう(表2)。後述する鍋木五郎宅へ14日から16日に一時滞在した彼は、17日にスミス家に移った。そのため、前所での食事は米飯や味噌汁を中心とする和食である。また、新聞社や協会など日本人が占有する施設で食事を取る場合には、やはり和食が主要なメニューになっている。それに対し、当然ながらスミス家での食事はパンとスープを中心とする洋食へ代わっている。ただし、鍋木家でもほぼ毎日の朝食ではマッシュ²⁴⁾とトーストが中心となり、忙しい朝食だけはバンクーバー在住の日本人にも洋食化が進んでいたようである²⁵⁾。

渡加当初、山宣は白人家庭でいわゆるハウスボーイをしていた。しかし、この雑用は薄給であり、同じ家内労働であっても技術的なガーデンボーイの方が高給であった(表1)。京都と東京で園芸に親しんでいた山宣の苦悩は、以下のように日記に綴られている(資料1・表3)。

[資料1]

ハウスウオーク悪からざれ供、多少の技術の素養ある余の如き者、ガーデンに働けるならばハウスウオークの如き薄給ならず、殊に仕事は面白く、此の如く単調ならず、あゝあゝ！早く早くガーデンの働きに移りたきものと急に感じたり。

(1907年5月23日)

1907年7月1日にバンクーバー・コールハーバー周辺の庭園を見学しているのは、彼の向上心を示していよう。7月9日には『レディース・ホーム・ジャーナル (*Ladies' Home Journal*)²⁶⁾』に掲載された園芸関係の記事を読んでいることも、その一端であろう。幼少期から園芸に親しみ、園芸見習として東京・早稲田の大隈重信邸への住み込みも経験していた山宣は、バンクーバーの有力新聞『プロヴィンクス』(*The Daily Province*)の求人欄にガーディナーとしての求職広告を掲載した。これを確認した彼は、次のように日記に記している²⁷⁾。

[資料2]

部屋にかへりプロヴィンクスヴィンクスの広告見る。第一番に余のが掲げてあり、目につきやすく価値あり。Wanted—Position as a Gardeners help of practical firm, by a Japanese boy, experienced about Indoor floriculture. S. y., P. O. Box 868 (略)日本人の広告なかなか多し。

(1907年8月13日)

表3 『山宣日記』にみるガーディナーに関する記述（1907～1908年）

年/月/日	内容
1907/5/23	ハウスワークから早くガーデンの仕事に移ることを希望。
6/30	鎬木牧師の話で、北バンクーバー21番街に1エーカー半ばかりの地所に日本庭園造園計画を聞く。日本風の庭園について知識技術があるといいが、年が年なので仕方がない。
7/ 1	コールハーバー周辺の庭園を見学する。庭にはセントリアポピー、エクスコルジア、フロックス、ジレニウムなど、温室にはフリジアやフワーン類のみ。
7/ 6	鎬木牧師の計画につき、好園芸家を得たくて、宇治へ詳しい手紙書く。
7/ 7	今月でハウスワークをやめて、ガーデンの仕事に移ると決心する。
7/ 9	『レディースホームジャーナル』の園芸に関する記事読む。
7/14	石原氏より1ドル借りて、明日にガーディナーの広告を出そうと思ったが中止。
7/16	ワールド社へ広告の申込みに行く予定は中止。
8/13	プロンスヴィーンズに広告が掲載される。
8/16	加奈陀新報社へ求職広告の件を問合せる。
9/23	9月17日より富豪エヴァンス氏のガーディナーになる。園丁長は鎬木牧師の知人の日本人、ボーイは5、6人で全員日本人。月給35ドル、毎日電鉄にて通勤。7～18時迄の11時間労働。日曜は休み。＜書簡＞
9/23	門氏のヘルプ、葉拾いをし、パテをこね、温室の硝子はめる。あとの人々は堆肥の積みかえをしている。
9/24	温室の硝子をあてて、パテをつける。
9/25	パテをこね引きつけ、硝子を並べ、パテを削る。落葉拾って帰る。
9/26	パテ削りを9時頃終わる。室内を掃いて、通路を板ブラシで洗う。午後には葉拾ひ、芝生の周囲のベッドのゼラニウム、ロベリア、苺を抜く。バラ、桃の剪定で出たゴミを孤輪車にてはこび、レーキ（熊手）できれいにする。
9/30	ゼラニウム、ヴォルビナ抜いて、捨ててきれいにし、耕し方、総がかり。小温室室内にて、葉蘭にペンキつけたが、落して海綿で拭う。
1908/2/3	午前8時より午後6時まで働く。冬季なので1ヶ月30ドルに減給。角園丁長と相談し、夏期は多くのボーイを集め、何ヶ所か事務所を造り、園芸仕事の請負を始める計画。＜書簡＞

注1：原文の記載のママにした

注2：書簡はすべて宇治・花やしき宛て

出典：佐々木敏二編（1979）『山本宣治全集 第6巻』、汐文社、214-278より作成

ようやく『プロヴィーンズ』に掲載されたものの、山宣は日本語新聞『加奈陀新報社』へも求職広告を問い合わせている。やがて、石原の義兄であるバンクーバー日本人教会初代牧師・鎬木五郎²⁸⁾の紹介で、彼は8月17日からエヴァンス邸において庭師の一步を踏み出した。ハウスボーイではなくガーディナーとして働くことがよほど嬉しかったのか、山宣は約1ヶ月も記さなかった日記へ以下のように綴っている。

[資料3]

本月十七日より本職にありつき候。当市屈指の富豪エヴァンス氏のガーデンにてグリーンハウスも大隈邸のにひけをとらず、園丁長は日本人しかも鎬木牧師の知り人、ボーイは五、六人皆日本人に候。月給三十五弗なれど、食、室ともなく、食事は協会にて（七円五十銭）、室は石原さんの二階を借用し、毎日電鉄にて通勤仕候。七時より六時迄十一時間なれど一寸も骨折れず。日曜は丸休みなればハウスワークよりは大いに気楽で候。エヴァンス氏は失恋の結果専ら花に注ぎ、（中略）同輩は皆白人。

（宇治・花やしき宛て書簡，1907年9月23日）

この部分を熟読すると、興味深い点がいくつかある。まず、日本での経歴から山宣はガーディナーを「本職」として意識していたようである。次は、「園丁長」が日本人、「ボーイ」が全員日本人であることである。つまり、ガーディナーの責任者は日本人であり、家内労働者も日本人であったようである。ただし、「月給三十五弗」の記述は表1と一致することから、日本人は家内労働を担いつつ、庭園業にも携わっていたのかもしれない。そして、同業は食事付きの住み込みではなかったようである。この点について、末尾の「同輩は皆白人」も参照しながら慎重に検討せねばならないが、家庭内の雑務（ハウスボーイ）はおもに日本人で、ガーディナーは白人であったと解せよう。つまり、単純労働は日本人、多少の技術を有する庭園業は白人が担っていたようである。

下宿先の石原宅から、「毎日電鉄にて通勤」している記述も看過できない。これは、港湾に隣接するパウエル地区からエヴァンス邸へ、いわゆる路面電車での通勤である。朝7時から夕方6時までの11時間にもおよぶ長時間労働は、山宣には負担でなかった。「7～18時迄の11時間労働」はやや長いようだが、早朝からの勤務に意味がある。北緯50度に位置するバンクーバーの9月中旬では、7時頃にはすでに明るく、庭仕事は可能だった。そして、「日曜は丸休み」とあるように、ハウスワークでは日曜日も家内労働をして拘束されていたことがうかがわれる。

2 エヴァンス一家と庭園業

次に、山宣がガーディナーとして働いた「富豪エヴァンス氏」について紹介しよう。1888年に創立されたエヴァンス・コールマン・エヴァンス社 (Evans, Coleman & Evans, Ltd.) は、BC州を代表するセメントや木材など建築資材の取り扱い業者である²⁹⁾(図2)。創業者はパーシー・エヴァンス (Percy Evans) とアーネスト・エヴァンス (Ernest Evans) のイギリス人兄弟と、従兄弟のジョージ・コールマン (George Coleman) である。彼らは1888年にバンクーバーに移住し、建築資材の事業を開始した。バンクーバー島から石炭を移送し、それを本土で販売する3人は、バンクーバーの港湾地区を拠点に事業を展開した。翌年に蒸気タグボートを購入した彼らは、水上に繋留した製材会社の丸太の牽引にも活用し、木材販売も手がけて事業を拡大した。20世紀初頭における建築資材の大手供給会社となった当社は、ビクトリアやバンクーバー、ならびに各地に支店を開設した。BC州の発展は、建設資材の強い需要を生み出したのである³⁰⁾。

1911年、レイモンド・サンズ社 (Raymond & Sons) を買収した同社はビクトリアでの事業を拡大し、パンドラ通に店舗、インナーハーバーにあるワーフ通に倉

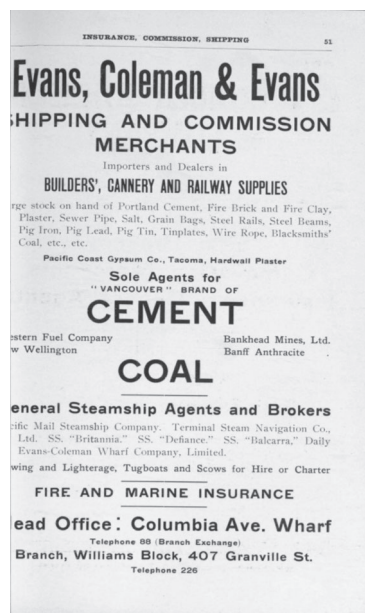


図2 Henderson's city of Vancouver directory 1909, 51に掲載されたエヴァンス社の広告
UBC Library Open Collections
(<http://resolve.library.ubc.ca/cgi-bin/catsearch?bid=1197804>)より転載

庫を建設した。「BC州の重要な商社」と呼ばれた同社は、第二次世界大戦を経た1957年にオーシャン・セメント会社（Ocean Cement Company）に買収されるまで、建築資材の供給会社として事業を続けたのである。

ところで、エヴァンスが造園に熱心だった理由について、山宣日記によれば「失恋」によるものであるらしい（資料3）。花作りや造園が人々の心を癒やすことは、誰しも起こりえるのかもしれない。それだけでなく、同時期にビクトリア郊外にブッチャート庭園が造園されたこと、そして両社とのつながりは看過できない。ビクトリアで建築用材を介して協力関係にあったブッチャート家は、1908年頃に石灰石採取後の荒廃地に庭園を建造した。そこには、横浜市出身の岸田伊三郎が日本庭園を作庭した。両地に庭園が造られた事実を、感傷的な理由だけで判断することは慎まねばならない。しかし、ビジネスパートナーとして両者が連携していた史実は等閑視できない³¹⁾。そして両者とも日本人に寛容であり、その園丁長にブッチャート邸の岸田と並んで、エヴァンス邸では次に紹介する角佐六を迎えていたことは記録しておくべきである。

3 園丁長の角佐六

エヴァンス邸でガーディナーとなった山宣は、園丁長の角佐六の指示のもと働いた。山宣に先んじて1898（明治31）年にバンクーバーへ上陸した角は、まずは漁業や山林伐採業へ従事した。日露戦争（1904～1905年）での従軍のため一時帰国後、彼は再入国してエヴァンス邸の花園の監督者になった³²⁾。当初、『山宣日記』に「門」や「かど」と表記されていた角について、大陸日報社に次のような記録がある³³⁾。

[資料5] 角佐六君

明治三十一年に初めてバンクーバーに上陸し、漁業山林伐木等に従事して地盤を作るに努めつつあったが、たまたま日露戦争の起った際、身軍籍に在ったので召集され、各地に転戦して偉功を立て、其帰って来てから再び晩市に来て、エバンス氏の住宅に働いて太く主人の気に入る、益忠勤を抜んで居た。エバンス氏所有花園の監督として、庭作り花卉の栽培に特殊の技能を有って居た。氏の帰る時は君を英國に同行して共にとも風月を樂まうした。エバンス氏は大の日本最負の人であった。それ故日本より名士の晩市に来た時は、時々招待して饗應し、且花園に案内した。角氏が其間にあつて何時も斡旋せられたのは其労を多とする。或日主人の飼馬に秣を與へて鬣髪を櫛らうとした時、突然駿馬は一蹴を加へた、不幸にして急所に當つた爲め、終に頓死を遂げた。妻君みね子に理財の才があつて、後事を整理し、遺愛を訓育して行く所は感すべきである。

このように、角佐六の経歴は興味深い。「庭作り花卉の栽培に特殊の技能を有って居た」とあるが、この技術を角がどのようにして取得したのかは記述されていない。渡加後にエヴァンス邸において独学で修得したのかもしれないが、出身地の地域性も見のがせない。彼の生誕地である広島県安佐郡三川村古市（現・広島県安佐南区）は、雲石街道沿いの集落であった。この街道は安芸・広島と出雲（現・島根県東部）や石見（現・島根県西部）とを結ぶ街道の総称で、近世の広島城下に近接した古市は麻の集散地であった。そのため、関連する各種の商店や顧客

への娯楽施設が集積し、近代初期におおいに繁栄したという³⁴⁾。このような交易の集落で生まれた角は庭園を愛し、草花を育てる文化にふれていたのかもしれない。さらに、当時におけるカナダの事業家が手がける庭園へ日本からどのような「名士」の来訪があったかは、文化交流の点からも興味深い³⁵⁾。

残念ながら、馬に蹴られるという不慮の事故で角は命を落とした。未亡人となったミネ子の活躍も、記録に残っている³⁶⁾。

[資料6] 角ミネ子

(前略) 女史は広島県安佐郡三川村大字古市に本籍を有し、明治三十三年ヴ市に上陸して晩市に來り良人佐六君と共にキャンペー街に居住す。良人は初めエーバンスに、後に山林伐木業に従事し、更にポテト売買並に漁業に従ひしが、三十七八年日露の役に従軍す、此間ミネ子は家庭を整へて勤勉刻苦し良人をして後顧の憂ひなからしむ、不幸にして四十三年佐六君の死去するや、爾來巾幗の身を以て家業を經營し、此間土地家屋を購入する等縦横の手腕を揮ひ、内にありてはよく兒女教養の任に當りて家名を辱しめず、尚進んで社會公共事業に尽力し、日本婦人會並に佛教婦人會等の役員に挙げられて斡旋する所鮮少ならず。ミネ子は頗る理財の才に長け、良人の死後旅館を営み大に資産を積みしが大正七年良人の遺骨を携へて一旦歸國し、親しく親族故舊に接して久潤の情を述べ、兒女の教養を依託し再び帰晩す。(後略)

夫婦の記録を読み比べると、1898(明治31)年にまず夫・佐六がバンクーバーに移り、その2年後の1900(明治33)年に妻・ミネ子が呼び寄せられている。前述した記録では、夫・佐六は渡加当初に漁業・山林伐木業に従事し、日露戦争を経た再渡加後にエヴァンス邸で庭園業に就いている。それに対し、ミネ子の記録ではエヴァンス邸→山林伐木業→ポテト売買・漁業→日露戦争の順に佐六の経歴が記されている。佐六が亡くなった1910年から12年後の記録であるため、角家や執筆者に誤認があったのかもしれない³⁷⁾。

夫・佐六を亡くした8年後の1918(大正7)年、彼女は遺骨を抱えて子供たちと共に帰国した。その時、長男と長女を母国に托して再渡加したためか、1922年の記録には二男・良雄、二女・芳子の2人の子供たちしか記されていない³⁸⁾。パウエル地区の旅館業で生計を立てた彼女は、日本婦人会や仏教婦人会などの役員も務めるほどの人徳者であった。

IV 庭園業の諸相

山宣の日記からは、当時のバンクーバーにおける園芸の様子が垣間みられる。例えば、興味深いのは温室をめぐる作業である。1907年9月23日以降の日記を読めば、白人の有する庭園のイメージがつかめる(表3)。植物の剪定や、それによって生じた落ち葉やゴミ拾い、肥料の製造や堆肥の積み替えなどが記されている。それらよりも、温室の設置をめぐる記述が多いのである。つまり、ガラスを嵌めて、そこに捏ねたパテをつめて固定するガーディナーは、この温室内でさまざまな草花を栽培するのである。9月下旬にこの作業が行われているのは、やがて訪

れる雨期となる冬季³⁹⁾に備えるためであろう。

残念ながら、冬季の作業については日記に記されていない。次に庭園業の様子が綴られるのは翌1908年2月3日である。ここでは具体的な作業内容よりも、ガーディナーの組織化に関する記述が重要である。

[資料7]

(略) 角といふ園丁長と相談し今年の夏期は一つ沢山ボーイを集め何所かオフィス(事務所)を造り電話でも掛け園芸仕事のカンツラクト(請負)を始めるべく計画致し居り候。毎週一日か二日とか約束を請負ふてボーイに器械を携へさせ廻り歩く、つまり絶えず園丁を雇ふておく程でもないうちの仕事を請負ひ廻つて歩き一時間三十仙(¢)以上、四十五仙取り、ボーイのコムミッションをとるといふ商法に御座候。北晩香坡にせよ此請負にせよ何にしても此年内には実収五十弗以上にならねばならぬと決心致候。(後略)

(1908年2月3日)

つまり、園丁長の角と山宣は、多くのガーディナーを雇用し、庭園請負業の経営を試みている。エヴァンス邸とは異なり、特定のガーディナーを常時雇用することのない白人邸宅を、週に1、2日ほど順次回って庭仕事を請け負うという、新しい計画が記されている。なお、当時の移動は自動車ではなく、まだ徒歩であった。ただし、芝草刈りについては簡単な機器は使用されていたようである。時給は30～45セントであるが、年内には1ヶ月に50ドルの獲得がめざされている。庭園業に対し、特別な技能を有していることへのプライド、それが認知されていないことへの葛藤、そして新しいビジネスモデルへの挑戦が読みとれるのである。

1907年に比べて1909年4月の記述は厚く、その作業内容は表4のようにまとめられる。2年前の秋季と違って、ガラス温室の作製はない。それは当時、エヴァンス氏の「失恋」の直後であり、造園の初期段階だったからであろう。4月10～22日に記された内容から明らかになるのは次の2点で、第1は具体的な作業である。「熊手を使ったゴミ取りだし(4月12日)」、「庭の砂れきを取り除き(4月13日)」、「骨粉を庭に施肥(4月14日)」や「草花の移植や剪定(4月19日)」などがある。さらに「塀への草花の打ちつけ(4月20日)」、「ローラーを引いて土ならし(4月22日)」のような力仕事も記されている。4月17日に「モワーに手を触れるは今日が初めて」とあるように、芝刈り機(mower)はあるものの、まだ一般的には普及していなかったと思われる。

第2は、前年から計画していたガーディナーの組織化についてである。以前からのエヴァンス邸だけでなく、山宣は4月10日にはホオンビー街539番地邸で庭仕事を行っている。4月12日にはパークレー街のヤング邸で庭仕事を行った彼は、4月19日からロブソン通・ビュート街北東角のタンストール医師邸へ通っている。現存ではビル群が建ち並ぶバンクーバー都心部でも、20世紀初頭では庭を有する大邸宅がみられたのであろう。

角の元で雇用されている日本人ガーディナーとして、「先輩の一人(4月12日)」、「新参の朋輩影山某氏と共にカーにて帰る(4月13日)」や「由太郎君も手伝う(4月17日)」などの同僚も記されている。「先輩」「新参」の語句からは、ガーディナー組織の発展していく様子が見えてくる。

表4 『山宣日記』にみるガーディナーに関する記述（1909年）

月/日	内容
4/10	午前だけのデーウォークする予定にて、ホオンビー五三九を訪ふ、唯々諾々前洗ひ始めしがアワー二十仙にねぎられ且失敬極まる婆なるを以って三十分程ただヘルプせしと思ひて理屈こねて出る。イヴァンス邸に帰途よれば例の如く留守。帰り途ハスチング街にて角氏に逢ひ早速談判まつまり、カフイのみ
4/12	先輩なる尚一人のにきゝて前の堀のきはをレーキかけホーイング。十時半よりパークレー街のヤング氏の裏庭を耕やす。前秋季耕せしと覚しきも、石礫盛に出で来る。六時三十分頃帰る。
4/13	カーにて角氏と一所になる。ヤング氏後園、引き続き石礫取捨て、薔移植す。午後三時頃より帰り温室の花の綿虫を石鹼にて洗ふ。夕、帰途は新参の朋輩影山某氏と共にカーにて帰る。
4/14	ヤング氏方薔薇、骨粉を施しレーキング、骨粉運び午後家の前芝生に施肥し、土を篩ひ打撒ける。三時頃戻り、昨日につゞき木瓜の如き蔓性植物の綿虫洗ひ、六時の笛なつてのちチューリップ運び出し掃き大急ぎ帰る。
4/17	朝方はイヴァンス邸にて土篩ひ方、十時頃より草刈り方、えらさうな事いふものモワーに手を触れるは今日が初めてにて可成呼吸六ヶし。昼食後も同じ、由太郎君も手伝ふ。それより道掃き、室内たゞ洗ひ外も同じ、正六時しまひ、夕食をへて帰りに衣替へ
4/19	朝方裏堀外排水溝上の土を運搬す。十時頃より亦出稼ぎ、今度はロブソン及びビュート街東北角の某医師の邸なり。外側。プリヴェット生垣かりこみ。午後三時頃より、薔薇剪定。帰れば少し早すぎたり、温室の戸閉ぢ亦明朝の準備す
4/20	昨日とつゞきタンストール医師邸に行き薔薇剪定及堀に打ちつける。午後枯枝すて生垣の側面剪定す、外堀のアイヴィー掃除し蔓を打付ける。朝十時頃、角氏と共にジョルジャ街の元Westend Nursery今は代異なるブラウンの温室に行く、室内の物別に立派なものなし、フューシャ等芽を失敬仕る
4/21	引きつゞきドクターへ出稼ぎす、外堀に長春藤打ちつけ方、角氏及び主人公皆ハスチングタウンの馬展覧会に行く。午後はプリヴェット生垣の下の塵取出し均らす可成手痛し。
4/22	仕事は引きつゞきドクターの家。パンター連中のジム、チャーレーのと五月蠅き事限りなし、垣のごみ掃除ををへて芝刈り方可成広く骨折れる。子供と戯れながらは興味あり。弁当を忘れ午後は休まんとも思ひしが思止まり昼は何もくはずにすます。午後はつゞき草刈り、垣の根元耕し、其れよりローラーを引来り均らし方、殊に腹に力なき所へ持て来て此仕事は腰抜けさうなり。しまひ方少し早すぎてきまり悪し。

注1：原文の記載のママにした

出典：佐々木敏二編（1979）『山本宣治全集 第6巻』、汐文社、361-365より作成

がわれる。また、4月13日の「カーにて角氏と一緒にいる」と「帰途は……共にカーにて帰る」という記述に留意したい。つまり、午前にエヴァンス邸、あるいは角の自宅から熊手や芝刈り機などの道具を積み込んだ自動車で出発した彼らは、顧客となる白人宅で順々に同僚を下ろしていく（drop off）。そして、午後に作業を終えた彼らを、次々に自動車で迎えに行く（pick up）のである⁴⁰。なお、1909年7月8日の牧野虎次郎宛ての書簡には、「青木兄」と記された友人が芝刈り機を購入した新聞広告を掲げ、パートナーとともに庭園業を開始したことが記されている。このように、当時のバンクーバーでは組織化された日本人ガーディナーの活躍が萌芽していたのである。

気温が上昇する春～夏季の乾期では除草、^{キンレンカ}金蓮花の移植、ならびにダリヤの球根、カクタス（サボテン科植物）やマクレツ（マーガレット）の購入のほか、スウィートピーやセントレアの成長の喜びが記されている。作業以外にも日記には、ほほえましいエピソードがみつけられる。4月22日には昼食の弁当を忘れたので、午後からは庭仕事を休止する予定だった。しかし、その

まま継続したため空腹に悩まされ、少し早めに仕事を納める気まずい様子が綴られている。その前日には、タンストール医師と角たちと一緒に山宣は、ヘイスティング通にある馬の展覧会⁴¹⁾へ視察に訪れている。有力な白人邸には、労働力としての荷役馬や庭仕事にたずさわる農耕馬が所有されていたのであろう。前述したように、このような役畜として活躍していた馬をめぐって角佐六に悲しい最期が訪れたのである。

V おわりに

観察眼の鋭い山宣は、身の回りに起こったさまざまな事象を日記に書き綴っている。それは、当時におけるバンクーバーの諸相を読解する足掛かりになる。その1つとして、1907年6月30日の日記には、「一寸秘密の用談」に関する記述がある（資料7）。

[資料7]

骨董品店及喫茶店其他花屋など中に設け、先ず一万弗位は投資するという考へにて、尚五十弗づつの株を募らんかと思ふと色々秘密の話をきかされたり。余がもう少し日本風の庭園について知識技術を有せば其局にあたりたけれど何分、年が年故仕方なし。

(1907年6月30日)

さらに7月6日には、「鑄木氏の計画」という文字もみえる（表3）。それは、いわゆる日本庭園の造園計画であった。鑄木を中心とする日本人グループは、北バンクーバー21番街に1.5エーカーの荒地を入手し、日本庭園の造園を画策していた。1908年になると、彼らは1口10ドルで3,000株を募集し、資本金3万ドルの日本庭園会社の設立を計画した。社長に就任した鑄木は、山宣を同社の事務主任に命じたのである。

造園計画の前年、1907年に起こったバンクーバー暴動をはじめ、当時のバンクーバーでは日本人に向けられた白人の視線は厳しかったに違いない。園芸経験があるとはいえ、20歳にも満たない山宣を事務主任に就かせ、設計から実際の造園以前の開墾手続きまで任せるといふ日本庭園計画は無謀であったといわざるをえない。結果として頓座したものの、骨董品店、喫茶店や花屋を設置するという日本庭園の意匠は、当時の日本文化の伝播や受容についてともに検討せねばならない⁴²⁾。

1909年6月24日の花やしき宛の書簡には、「園芸研究のために加奈陀此B・C・州に來りし事は臍をかむ共及ばざる一生の悔に候事を覚え候」という、後悔の気持ちが綴られている。さらに、「園芸愛好者もなく花を見ようといふ金持もなき成り共の集合地に於ては園芸家として口はなし」からは、開発途上のバンクーバーでは園芸文化は開花しておらず、造園家としては生計が成り立たなかったようである。ただし、山宣は園芸に関する資金を惜しまない一部の白人には敬服の念を表わしている。

今後は、角と山宣が試みた日本人ガーディナーによる請負システムの成長と、彼らの組織化について検討したい。1920年代における日本人排斥運動のなか、他産業からの転業によって日本人移民は庭園業を活路の1つとして見出した。とりわけ、サケ缶詰産業のオフシーズンであ

る秋～春季に庭園業を選択する日本人移民が現れるのである⁴³⁾。白人宅における家内労働の一部であった「庭仕事」が、やがて「庭園業」として日本人のエスニックビジネスに成長する過程の解明は、カナダ日本人移民史の再発見になる。

付記

本稿で活用した資料の探求について、UBC アジア図書館の喜多山知子様大変お世話になりました。末筆ながら、ここに記してお礼申し上げます。本稿の作成にあたっては、2020-2024 年度科研費基盤 C「バンクーバー大都市圏の日本人ガーディナー：技術革新にともなう庭園・造園業の展開」（代表：河原典史）、ならびに 2019 年度（公財）村田学術振興財団研究助成（人文科学）「海外の近代日本庭園の空間デザインをめぐる国際的研究－カナダ・バンクーバーにおける新渡戸庭園を中心として－」（代表：堤涼子）を使用しました。

注

- 1) ①柳田由紀子 (2006).『太平洋を渡った日本建築』, NTT 出版. ②片平幸 (2014).『日本庭園像の形成』, 思文閣.
- 2) 河原典史 (2012).「ビクトリアの球戯とバンクーバーの達磨落とし－ 20 世紀初頭のカナダにおける日本庭園の模索－」, マイグレーション研究会編『エスニシティを問いなおす－理論と変容－』, 関西大学出版会, 249-265.
- 3) 河原典史 (2012).「カナダにおける日系ガーディナーの先駆者たち (4)－「花嫁の滝」を築いた古賀大吉－」, *The Year of 2012 Membership Roster*, 23-29.
- 4) ビクトリアでは漁閑期における日本人によるラッコ漁の従事者、ボーウェン島では古賀の同郷者や、漁業ライセンスの未取得によって拿捕された日本人が造園を担った。ビクトリアについては不明な点が多く、今後は海獣漁の関わりから検討したい。
- 5) 1933 年 10 月 15 日にビクトリアで客死した新渡戸稲造を悼んで、12 月 15 日に日本領事の石井康を顧問とした新渡戸記念事業委員会が組織された。委員会には日加貿易に関わる日本人社会の重鎮の他、新渡戸を診察した鹿児島県揖宿郡指宿村（現・指宿市）出身の医師・下高原幸蔵も名を連ねていた。委員会はバンクーバーのスタンレー公園に日本庭園を造り、そこへ石灯笼の設置を計画した。石灯笼は、大阪市此花区西九条の合名会社・一栄商会で製造された。紆余曲折の結果、UBC 構内での日本庭園の造園が決まった。①河原典史 (2016).「バンクーバーにおける幻の新渡戸庭園－太平洋を渡った石灯笼－」, 『民俗建築』149, 31-39. ②河原典史 (2017).「幻の日本庭園を造った人びと－忘れられたバンクーバーの日本庭園史－」, 森隆男教授退職記念論考集刊行会編『住まいと人の文化』, 三協社, 15-33.
- 6) ガーディナーのなかには、庭園の設計・造園 (landscaper) を行う者もいる。本稿では、ほとんどが庭園業者 (maintenance, cleaner) であるものの、必ずしも区別が付かないので「ガーディナー (gardener)」とする。
- 7) 出身地とカナダでの生業との関係性を端的に表す「江州ソーミル、熊本ヤマ、死ぬよりましかなヘレン獲り」という俗言がある。滋賀県出身者は製材業 (sawmill)、熊本県出身者は山地 (ヤマ) で炭鉱夫や鉄道保線工、それらで事故死するよりは、鯀 (herring) や鮭の漁獲に携わる方がまだよいと、和歌山県出身者は語ったのである。①河原典史 (2017).「初期の日本人移民－江州ソーミル、熊本ヤマ、死ぬよりましかなヘレン獲り－」, 細川道久編著『カナダの歴史を知るための 50 章』, 明石書店, 300-305. ②河原典史 (2018).「カナダへの移民」, 日本移民学会編『日本人と海外移住－移民の歴史・現状・展望－』, 明石書店, 99-117.
- 8) ①吉田龍一編 (1926).『加奈陀在留邦人々名録』, 1-173 (佐々木敏二編 (2000).『カナダ移民史資料

- 第6巻, 不二出版.) ②大陸日報社刊 (1941). 『在加奈陀邦人々名録』, 1-204 (佐々木敏二編 (2000). 『カナダ移民史資料 第6巻』, 不二出版).
- 9) 大陸日報社刊 (1931). 『ビーシー州日本人電話帳』, 1-55 (佐々木敏二編 (2000). 『カナダ移民史資料 第6巻』, 不二出版).
- 10) 佐々木敏二 (1999). 『日本人カナダ移民史』, 不二出版.
- 11) 末永國紀 (2010). 『日系カナダ移民の社会史—太平洋を渡った近江商人の末裔たち—』, ミネルヴァ書房.
- 12) 白人の経営するサケ缶詰工場や製材所などでの日本人の雇用については, 不明な点が多かった。筆者は Debit (帳簿) や Check (小切手) を活用して, サケ缶詰工場に従事する日本人の実態を明らかにした。このような歴史地理学からのアプローチについては, 以下の拙著の第2章・II 「資料の活用と研究方法」で詳しく説明している。河原典史 (2021). 『カナダにおける日本人水産移民の歴史地理学研究』, 古今書院, 29-58.
- 13) 前掲 12)
- 14) 河原典史 (2021). 「第二次世界大戦前のバンクーバーにおける日本人ガーディナーの展開—庭を掃くかな伯耆人—」, 『立命館文学』, 672, 60-75.
- 15) 大岡栄美 「中国系移民—黄禍からアジア・太平洋との架け橋へ—」, 細川道久編著 『カナダの歴史を知るための50章』, 明石書店, 272-277.
- 16) 木村健二 (2018). 「近代日本の出移民史」, 日本移民学会編 『日本人と海外移住—移民の歴史・現状・展望—』, 明石書店, 31-49.
- 17) Canada. Royal Commission on Chinese (1902). *Immigration Report of the Royal Commission on Chinese and Japanese Immigration: Session 1902*, Ottawa: S.E. Dawson.
- 18) BC 州和歌山県人会会長を務めた田並謙二氏によれば, シーツにしわのないようベッドメイキングができて, 初めて一人前のハウスボーイと言われたという。
- 19) 前掲 12)
- 20) 佐々木敏二 (1974). 『山本宣治』, 汐文社.
- 21) 1881 (明治14) 年, 京都市西洞院高辻に生まれた石原明之助は, 1901 (明治34) 年に京都府立医学校を卒業後, 附属病院に眼科医として勤務した。同年12月, カナダ・スティーブストン漁者団体の附属病院に勤務するために渡加した。1904 (明治37) 年にバンクーバーで日本人最初の薬店を開業した彼は, 1907 (明治40) 年に結婚のため一時帰国後, 再渡航時に妻とその従弟にあたる山本宣治をともなった。石原は義兄・鏑木五郎の経営する加奈太新報社を補佐し, 日本人倶楽部の発起人となり, 加奈陀日本人会特別委員として衛生部長に就いた。中山訊四郎 (1922). 『加奈陀同胞発展大鑑 附録』, 52 (佐々木敏二 (1995). 『カナダ移民史資料 第2巻』, 不二出版, 88).
- 22) 佐々木敏二・小田切明徳編 (1977). 『山本宣治全集: 第6巻—日記・書簡集—』, 汐文社.
- 23) 漁場利用については, 拙著の第4章II 「フレーザー川の漁場利用」で論じている。河原典史 (2021). 『カナダにおける日本人水産移民の歴史地理学研究』, 古今書院, 98-110.
- 24) これは現在でも日常的に食べられる主食であるマッシュドポテトと思われ, 茹でたジャガイモを押しつぶし, 塩コショウやバターなどシンプルな味付けで仕上げたものである。
- 25) 筆者は, 山本のカナダへの渡航時に乗船した旅順丸での食事内容について紹介した。河原典史 (2022). 「カナダへの客船における食事—『山宣日記』の記述から—」, 河原典史・大原関一浩編著. 『移民の衣食住 I—海を渡って何を食べるのか—』, 文理閣, 80-83.
- 26) 『レディース・ホーム・ジャーナル』は, 女性の趣味とライフスタイルを対象として, 1891年からアメリカ合衆国フィラデルフィアの Curtis Publishing Company から出版された。
- 27) UBC 図書館所蔵の *The Daily Province* (マイクロフィルム版) を確認すると, 広告文は次のようであり, 日記の記述とはやや異なる。"WANTED—position as a Gardener's help by an experienced Japanese boy Apply S.Yamamoto. P.O.Box868" (*The Daily Province*, Aug. 13, 1907.)

- 28) 千葉県香取郡山倉村新里（現在の香取市）に生まれた鍋木五郎は、アメリカ・イリノイ州イバンスト大学神学部に学び、卒業後はアパー・アイ・オー大学校に進学した。1897年には、ビクトリア日本人美以協会の牧師となり、『晩香週報』（後の『加奈太新報』）を創刊した彼は、1899（明治32）年に日本人の選挙権獲得に関してイギリスへ赴いて奮闘し、教会・夜学校・白人学校にて教鞭を執った。妻・薫子は同志社出身で、石原明之助の実姉である。中山訊四郎（1922）『加奈陀同胞発展大鑑 附録』,113（佐々木敏二（1995）『カナダ移民史資料 第2巻』,不二出版,149）。
- 29) 住所氏名録である *Henderson's city of Vancouver directory*, 1909, 51 に掲載された広告によれば、エヴァンス社はバンクーバー港湾のコロンビア街、支店はグランビア通・ウィリアム街407にあった。残念ながら、庭園を併設したエヴァンス邸の場所は不明である。現在も住所氏名録として継承されている通称 *BC Directory* は1860年に *Edward Mallandaine Co.* によって編集された *First Victoria Directory* に遡る。1863年に *British Columbia Guide and Directory* に名称変更され、1867年には *Pacific Coast Business Directory* になった。2, 3年ごとに編集・改称が繰り返された当資料は、1887年に *The British Columbia Directory* となり、これが通称になっていく。1900年には、*Henderson Publishing Company* が編集を行った。そして、1918年にはバンクーバーとビクトリアの都市域は同社、他のBC州各地については *Wringley Directory Limited* が担うようになり、やがて1926年には全域を後者が編むようになる。さらに、1934年には新たに *Sun Directory Limited* が編集し、それまで社名が冠されていた住所氏名録の名称は *British Columbia & Yukon Directory* に統一されるのである。このような *Directory*（住所氏名録）の書誌情報とその編纂については、拙著の第2章- II「資料の活用と研究方法」で紹介している。河原典史（2021）『カナダにおける日本人水産移民の歴史地理学研究』,古今書院,29-58。
- 30) エヴァンス社については、交流のあったブッチャート家に関するアーカイブ記録による。<http://www.butchartgardenshistory.com/evans-coleman-evans/>, 最終閲覧日:2022年6月10日。
- 31) ビクトリア郊外に石灰岩採取地を有し、セメント工場を経営していたロバート・ブッチャートは、1910年から1937年までエヴァンス・コールマン・エヴァンス社の取締役に所属していた。前掲30)
- 32) 前掲2)
- 33) 中山訊四郎（1922）『加奈陀同胞発展大鑑 附録』,354（佐々木敏二（1995）『カナダ移民史資料 第3巻』,不二出版,354）。
- 34) 三ツ井村古市をはじめとする広島県安佐郡は、多くのカナダ移民の輩出地である。ハワイへの官約移民や、その後の契約移民としてのアメリカへの移住は紹介されているが、カナダ移民についての詳細は必ずしも明らかではない。水害の発生や麻苧製造の減少によって、新たな活路を求めた渡航について検討が必要である。①広島県安佐郡自治協会（1927）『郡役所廃止記念 安佐郡誌』,38-39（芸備風土研究会（1975）『復刻 安佐郡誌』,38-39）。②広島県編（1993）『広島県移住史 通史編』,広島県,180-191。③安古市町役場編（1970）『安古市町誌』,安古市町役場,321-332・521-532。④ミチコ・ミッチェル・アユカワ著;和泉真澄訳（2012）『カナダへ渡った広島移民-移住の始まりから真珠湾攻撃前夜まで-』,明石書店,30-42。
- 35) バンクーバーへの日本からの名士の訪問についても、史実を明らかにせねばならない。今後の課題である。
- 36) 中山訊四郎（1922）『加奈陀同胞発展大鑑 附録』,569（佐々木敏二（1995）『カナダ移民史資料 第2巻』,不二出版,607）。
- 37) 角夫婦の渡航については、外務省外交史料館所蔵の「外国旅券下附表」を精査すると判明できよう。この資料の活用については、前掲12)を参照されたい。
- 38) なお、三男・哲男は死亡とある。中山訊四郎（1922）『加奈陀同胞発展大鑑 附録』,137（佐々木敏二（1995）『カナダ移民史資料 第3巻』,不二出版,519）。
- 39) 地中海気候に属するバンクーバーでは10月～3月は雨期となり、ほぼ毎日小雨が続く。12月～2月には降雪がみられる。

- 40) 白人邸宅を廻って庭仕事を担う場合、徒歩と自動車とではその範囲、いわば顧客圏は異なる。芝刈機や自動車などの機器の導入によって、ガーディナーの時空間的な行動は変化する。かかる点は戦前～戦後を通じた日本人ガーディナー史を検討する場合、極めて重要な視点となる。この課題については、別稿で検討したい。
- 41) 太平洋戦争の開戦によって敵性外国人となった日本人は、この馬の博覧会会場に強制収容された。現在では、遊園地・Pacific National Exhibition (PNE) として親しまれているが、この場所は日本人移民史において忘れてはならない場所である。
- 42) かつて筆者は、この造園の頓挫について拙稿を記した。河原典史(2012).「ビクトリアの球戯とバンクーバーの達磨落とし—20世紀初頭のカナダにおける日本庭園の模索—」, マイグレーション研究会編. 『エスニシティを問いなおす—理論と変容—』, 関西大学出版会, 249-265. 山宣日記の精査によって造園計画を再検討することを、今後の課題として記しておきたい。
- 43) この点については、拙著の第9章「水産移民の分業システムとネットワーク」に提起している。河原典史(2021). 『カナダにおける日本人水産移民の歴史地理学研究』, 古今書院, 281-291.

